



TITLE:

サル類保健飼育管理施設(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

千葉, 敏郎; 松林, 清明; 後藤, 俊二; 松林, 伸子

CITATION:

千葉, 敏郎 ...[et al]. サル類保健飼育管理施設(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1977, 7: 22-24

ISSUE DATE:

1977-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162776>

RIGHT:

や、個々のトピックについて調べている。

2) 飼育ニホンザルに対する自然食の給餌実験

森 明雄・山口直嗣・冠地富士男

ニホンザルを飼育し、野外で採食することのわかっている食物を与え、摂食速度と摂食量及び食物の選択性等の生物経済学的研究を行った。

3) 内部寄生虫に関する研究

今田 勲(宮崎大)・森 明雄

内部寄生虫卵の季節変化を、毎月1回、個体毎に採糞することにより、定量的に調べた。

なお、51年度に本施設を利用した共同利用研究者は、菅原和孝(京大)である。その他長期滞在し、利用した研究者は、今田勲(宮崎大)、山極寿一(京大)、岩本俊孝(宮崎大)である。本年度は学部学生で、滞在中、フィールドワークの訓練を行う者が多かったのが特徴であった。

本年度に、本施設を訪問あるいは利用した研究者は、延べ300人である。

学 会 発 表

1) ニホンザルに対する自然食の給餌実験

森 明雄・山口直嗣・冠地富士男

第21回プリマテス研究会(1977)

サル類保健飼育管理施設

千葉敏郎・松林清明

後藤俊二・松林伸子¹⁾

昭和50年度におけるインド産アカゲザルの輸入状況の悪化は、51年度においてはやや緩和された。しかし、前年度の協議員会によって決定された自家繁殖態勢の充実強化と、外国産サルの輸入頭数削減の基本方針に基づき、51年度サル施設運営費によるサル購入頭数は僅かに29に留まった(第1表)。ちなみに、前年度における購入頭数は70である。これに対し、51年度科研費による購入頭数は48(前年度は23)である。すなわち、サル施設運営費による購入頭数と科研費によるそれとの比は、ここにおいて完全に逆転したことになる。このことは、最近数年間におけるサル施設運営費の伸び率が頭打ちの状態にあり、前年度比について見ればむしろ減額されていることとも大いに関連する。今後においても運営費の増額は全く期待し難いとすれば、また上述の科研費による購入頭数の増加の傾向が定常化するものと仮定すれば、それは本研究所全体の研究体制にとって、必ずしも好ましい結果を生ずるものではあるまい。

自家繁殖態勢の充実強化の基本方針としては、本研究

1) 教務職員

所内に戸外グループケージを増設することに主眼が置かれ、そのための予算確保の努力が過年度に引き続きなされてきたが、今年度もまたその実現は見ずに終わった。しかし、科研費による戸外グループケージ2棟の建設が現在進められつつあり、これの活用による成果の増進には、将来期待するものが少なくあるまい。

研究所内で使用されるニホンザルに関して言えば、すべて自家生産によることが最も望ましいことである。しかし、自家繁殖態勢が完全に整う迄は、当面所外からその供給を仰がねばならず、そのためには専門家による合理的な生態管理が適正に行なわれている野外放飼群あるいは野猿公園から、生体資料として恒常的に提供してもらい、これを有効適切に研究に供する方策を取らざるを得まい。

研究 概 要

1) ニホンザルの精子形成のKinetics—野外群と室内群との比較

千葉 敏 郎

前年に引き続き、上記両群における精子形成の季節変動を追及しているが、今年度は特に非繁殖期を中心として材料の採取および観察を行なった。それによれば、非繁殖期における野外群においては確かに精子形成機能の低下が認められるが、高令のものは若令のものに比し、その低下の度が小である傾向を示す。他方、室内で長期飼育されている高令のものにおいては、野外群における如き季節的変動は認め難いことが分った。

2) 室内飼育ニホンザルにおける精細胞の分裂パターン

千葉 敏 郎

去勢によって得た精巣組織片、およびこれから分離した精細管標本(in totoもしくは縦断)を用い、特に精原細胞を中心に各世代精細胞の分裂パターンを定量的に追及している。

3) サル類精液の物理化学性状の比較検討

松 林 清 明

主としてcoagulationの生物学的意義を探る為、電気刺激による各種サルの精液採取とその性状分析に取り組んでいる。

4) 小型霊長類の実験動物化に関する研究

松 林 清 明

ワタボウシバンシユ(Saguinus oedipus)、シルバーモセツト(Callithrix argentatus)を用いて、生理的諸数値のデータを積み重ねると共に、実際の室内繁殖を行っている。尿中エストロゲン量の季節変動及び遺伝的変異性の定量についても調べている。

5) ニホンザル野外群の健康調査

松林清明・千葉敏郎

志賀C群についての総合捕獲調査に於て、臨床班とし

て一般診断、血液検査、糞便内虫卵検査等を担当した。

6) 霊長類の眼底像に関する基礎的研究

後 藤 俊 二

前年と同様各種サル類の眼底像収集を行ない、特に各年令層のニホンザル個体の例数増加をはかり、成体においてはM. f. fuscataとM. f. yakuiの個体グループの間には若干の差異を見い出した。各年令層の検眼鏡像所見の比較についてはその形態的变化を詳細にとらえるには至っていない。

また、一部所外研究者との共同研究により眼底撮影法の標準化作業を進めた。

7) 異常眼底像解明の試み

後 藤 俊 二

眼底の病変像を有する例についての眼科的な手法を中心とした臨床観察を進行中。

論 文

1) Tiba, T. : Kinetics of spermatogenesis in the

mink. Proc. 8th Intern. Congr. Anim. Reprod. & A. I. (1976. Krakow) (in press)

- 2) 和秀雄・松林清明・町田昌昭 (1975): 志賀A群ニホンザルの臨床検査成績。生理生態, 16 (1), 35—46.

報 告

- 1) 松林清明 (1976): ニホンザルのケージ内出産。モンキー, 20 (3), 6—11.

学 会 発 表

- 1) 野外群と室内群におけるニホンザル精子形成の季節的変動 (予報)

千葉敏郎・和 秀雄

第21回プリマーテス研究会 (1977)

- 2) マーモセット類のケージ及び保定装置に関する新しい試み

松林清明・熊崎清則

第21回プリマーテス研究会 (1977)

第1表 昭和51年度サル移動状況 (1976年)

昭和51年度末飼育頭数 (1976年)

種 名	入 荷			出 産	失 験 殺	事 故 死	管 理 不 良	結 核 殺	死 亡					種 名	頭 数
	校 費	科 研 費	寄 贈						呼 吸 系	消 化 系	循 環 系	運 動 系	其 他		
コ モ ン ツ バ イ	5			6	2	3			1	1			7	コ モ ン ツ バ イ	9
シルバーマーモセット		8	7						(1)	(6)				ス ロ ー ロ リ ス	4
ワタボウシタマリン				3									2	オ オ ギ ャ ラ ゴ	7
リ ス ザ ル				1										ワタボウシタマリン	22
ミ ド リ ザ ル				1										シルバーマーモセット	8
バ タ ス ザ ル										2				ヨ ザ ル	2
ニ ホ ン ザ ル		10	6	17	12	1			3	1		1		リ ス ザ ル	6
ヤクニホンザル				1	1				1					ノドジロオマキザル	1
ア カ ゲ ザ ル	24	30		6	26	2	13(2)	(1)	7(5)					フ サ オ マ キ ザ ル	3
タイワンザル				4					1	1				チュウベイクモザル	2
カニクイザル			1	1	2	1								ミ ド リ ザ ル	4
ブ タ オ ザ ル				1	2		1		1					バ タ ス ザ ル	1
ボンネットザル				3					1				1	ア カ ゲ ザ ル	132
ベニガオザル				2	3					2	1			ニ ホ ン ザ ル	149
ムーアーマンキー										1				ヤクニホンザル	20
マ ン ト ヒ ヒ					6									M.f.f.×M.f.y.	13
M.f.f.×M.f.y.					3		1						1	タイワンザル	25
小 計	29	48	14						10(2)	21(1)	1	1	11	ブ タ オ ザ ル	11
合 計		91		46	57	7	3	3(2)		44(3)				ベ ニ ガ オ ザ ル	13
														ボ ン ネ ッ ト ザ ル	17
														カ ニ ク イ ザ ル	12
														E.p.×Ca.	1
														マ ン ト ヒ ヒ	2
														シ ロ テ ナ ガ ザ ル	2
														ア ジ ル テ ナ ガ ザ ル	1
														チ ン パ ン ジ ー	1
														24種 472頭	

(注) ① () 印検査中に死亡のサル

② 年度末飼育頭数472頭のうち57頭は科研費分のサルである

③ 総増加数—総減少数=137—114=23 (50年度より23頭増加)

第2表 昭和51年度サル施設経費概要

項	目	金額 (千円)
ケ	ー ジ 補 修 費	406
ケ	ー ジ 購 入 費	750
備	品 費	175
サ	ル 購 入 費	960
サ	ル 飼 料 購 入 費	6,252
薬	品 費	876
消	耗 品 費	1,088
人	件 費	4,861
雑	費	523
	計	15,891

ニホンザル研究林

ニホンザル研究林施設設置の準備段階として、特別事業(下北)によって下記の調査研究および折衝が行なわれた。

1. 下北半島：1)主として食痕、糞内容と直接観察から、年間の食物の季節変化と採食行動の資料を集積記録した(和田久也との共同研究)。2)これまで知られた約60地点の泊り場のうち25地点について林分構造、植生のなかでの位置・地形的特性の調査を進め、調査記録の検討を行なった(森治他との共同研究)。3)ブナ・ヒバ林の択伐の施業と更新の過程を永久クオドラット(40×40m²)を設けて追跡調査した。択伐天然更新の造林技術的解析と、それにともなっておこる森林植生のサルの生息環境としての変化の予測を行なうことを目的としている。4)76年12月4日～29日下北I群(易国間川～壺ノ尻焼山沢にかけての地域)を対象に積雪期の土地利用、食物、遊動、個体数、性年齢構成等に関する生態学的調査をおこなった。この期間の調査によってこれまで不明であった東側の利用域の状況が明らかになった。77年2月～3月、M群の調査(前年度より継続)を行なった。重点は、この群れの進みはじめたhabituationの変化と個体群動態の追跡であった。76年秋はブナの豊作、ヤマブドウの豊作があったため、12月、3月ともに普通の年にはみられない特異な遊動パターンを観察した。これは、今後、ニホンザル個体群の生活維持と森林施業のあるべき姿、とを考える枠組を与える重要な知見である。

2. 上信越研究林：上信越研究林は、志賀高原と木曽の2カ所が含まれるが、今年度は志賀高原研究林候補地に重点をおいた。上信越ニホンザル調査団(代表大沢済)が結成され、1977年2月、群の冬季における寒冷地適応の問題を解明するために、生理、臨床、形態、遺伝、生化学の各分野を総合した研究が行なわれた。19頭を捕獲し、所期の成果をえた。77年3月には、同調査団の

好広真一、常田英士、油田よし子によって、雑魚川、魚野川の生態調査、C群については上記3人に鈴木が加わり、A、B、C群の遊動と社会生活についての調査を行った。これらの諸調査は、研究林設置のための基礎資料として有効に活用される。

3. 屋久島：1)集中調査(第4次)、1976年7月15日～8月5日(22日間)にわたり、12名(丸橋珠樹、山極寿一、黒田末寿、油田よし子、好広真一、福田喜八郎、福田史夫、東滋、後藤俊二、熊崎清則、瀬戸口烈司、木下実)による共同調査をおこなった。目的としたのは、研究林予定地を中心とする地域個体群の現状と動態を、継時的につかむことであった。A)永田一瀬切間の西部林道ぞい、国割岳斜面の国有林(下屋久営林署1～6林班：研究林予定地)、B)それに隣接する民有林、C)国割岳西北麓(上屋久営林署)を対象に調査した。全域について群れの分布、群れの大きさをおさえた。4群については性・年齢構成・遊動・群間関係・遊動時のグルーピングなどについてくわしい調査がなされた。2)丸橋珠樹がK、O群について、3月～12月まで生態学的調査を行ない、自然群のhabituationのもとに、遊動と土地利用の季節的变化の研究をおこなった。研究林予定地域に隣接する国割岳西南の森林生態系の保護に関して屋久島研究グループから関係各方面へ要望書を提出した。

上記のほか、研究林予定地を場としておこなわれた研究活動は、次のとおりである。

鈴木延夫(北大・文)他：遊動中の群れ内での個体の空間配置に関する研究。

大崎雅一(京大・理)：積雪期の群れの生態学的研究。

大 学 院 学 生

昭和51年度における京都大学理学研究科動物学専攻霊長類学学科の学生、指導教官および研究テーマは次のとおりである。

氏名	学年	指導教官	研究テーマ
佐藤 俊	D 3	河合 雅雄	ケニア北部に住むレンデュー族の遊牧生活に関する研究
渡辺邦夫	D 3	川村 俊蔵	シシバナザルの社会行動
菅原和孝	D 2	河合 雅雄	ニホンザル自然群における青年期のオスの成長にともなう社会関係の変遷に関する社会学的研究
平石邦義	D 2	川村 俊蔵	モズの社会行動
松村道一	D 2	久保田 競	霊長類の随意運動の制御におけるシナプス機構の解析